

今年の七月から八月にかけての約三週間、テレビジョン番組の撮影のためにブータン王国を訪問した。ヒマラヤ山麓に展開する人口七〇万人の小国であるが、国民総幸福量（GNH）を国家目標とすることで注目されている。訪問時期に、ブータンの国土面積における森林面積の比率が七〇%を突破したことが話題になっており、対談させていただいた総理大臣や環境大臣も自慢しておられた。

これはGNHを推進するための四つの主要政策の一つをヒマラヤ山麓の自然環境の保護としている効果である。そのため樹木の伐採には申請が必要で、役所は漠然とではなく、伐採を許可する樹木を特定するという厳密な仕組みで森林を管理し、係官が監視する体制も整備されている。さらに樹木を一本伐採すると二本の植樹が義務となっている制度も存在し、一五年前の六四%から七〇%に増大するという成果になったのである。

ブータンでは大半の家屋が木造であり、燃料も木材に大幅に依存しているから、そのような状況で森林面積を増大させてきたことは偉業である一方、九州程度の面積の国土に七〇万人が生活しているという状況からすれば、達成可能な数字である。むしろ世界有数の人口密度で生活している日本の六八%という森林面積の比率のほうが驚異である。これはフィンランドの七四%、ブータンの七〇%に肉薄する世界三位の数字である。

ただし、その数字は木材の自給比率二〇%、すなわち外国の森林を伐採して自国の木材需要を充足しているという非難にもなりかねない。実際、五〇年前には九〇%であった自給比率は、安価な海外の木材に依存して、四〇年前には五〇%、二〇年前には三〇%と一気に下降してきた。このような問題がないわけではないが、日本の森林が維持されてきた背景には伝統文化の存在があることにも気付く必要がある。

昨年、名古屋市で開催された生物多様性条約第一〇回締約国会議（COP10）で話題になった言葉がある。「SATOYAMA」すなわち「里山」である。この意味は「奥山」と一対にすると理解しやすい。かつて日本の奥深い森林は神々の領域として信仰の対象とされ、村人が日常進入することは禁止されていた。普段は山麓の神社に参拝し、一年の一定期間だけが参拝や修行のために開放される仕組みであった。

その奥山から下側の集落に隣接する森林が里山とされ、村人は生活のために木材を伐採し、山菜を採集し、椎茸を栽培するなどの場所として利用してきた。さらに最近では「里川」や「里海」という概念も注目され、それらを媒介として淡水、動物、資源が循環している仕組みこそ、人間が自然環境を利用しながら自然環境を長期に維持してきた根拠として注目されてきたのである。最近、この里山について快挙があった。

本年六月、北京で開催された国際連合食糧農業機関（FAO）の会議で、佐渡と能登が世界農業遺産に登録されたことである。これは自然環境や生物資源を維持しながら実施されている持続可能な伝統農業を認定し顕彰する制度であり、佐渡は「トキと共生する佐渡の里山」、能登は「能登半島の里山里海」として登録されることになった。これまで八例しかなく、しかも先進諸国では最初の登録という快挙である。

残念なことに、日本のマスメディアは価値を理解できず、世界自然遺産や世界文化遺産は過剰なほどに報道する一方、世界農業遺産は全国規模で報道されることはほとんどなかった。世界では森林が急速に減少しているが、その最大の原因は農地や牧場を確保するための森林破壊である。その解決に貢献する日本の伝統農業を、自信をもって世界に披露する見識が日本に必要である。